

### 3. 経済成長 1 : 農業 (農村開発から地域開発へ)

\* 世界人口約 69 億人→それだけの人口を養う食糧生産は可能か?

#### 【農村貧困の問題】

- 開発において重要なのは: 経済生産増大→経済成長→貧困解消
- 多くの国は (都市化現象の一方) 大半人口は農村 (Rural areas) 居住。
- 農村部と都市部の貧困の性質は違う (都市部=貨幣経済=所得貧困: 現金収入少/都市部=貨幣経済は絶対的問題でない=サービス不足や食糧不足がより問題)
- 農村部では社会保障制度が未整備→栄養不足による貧困

#### 【これまでの農業・農村開発の取り組みの変遷】

1950年代: 近代化の時代 (進歩が遅れた農業と地域開発)

1960年代: 緑の革命 (緑の革命開始、農業の構造改革、技術移転、機械化、農業普及)

1970年代: 国家主導の時代 (総合農村開発、政府主導の農業政策、緑の革命継続)

1980年代: 市場自由化時代 (構造調整、市場による価格決定、政府縮小、NGO 台頭)

1990年代: エンパワーメントの時代 (参加型農村研究、農村とセーフティーネット、環境と持続性)

2000年から生計アプローチの時代 (持続的な生計維持、よいガバナンス、地方分権、社会保障)

#### 【1960年代: 緑の革命】

緑の革命 (Green revolution) : 農業の近代化。農業の生産性の飛躍的向上を目指し、品種改良された穀物などの新しい農業技術の確立と、その技術の途上国への導入過程をいう。

- 国際イネ研究所 (International rice Research Institute, IRRI) ロックフェラー、フォード財団の援助によりフィリピンに設立→1966年「ミラクル・ライス」(奇跡の米) = IR-8 が開発。
- 国際トウモロコシ小麦改良センター (Centro Internacional de Mejoramiento de Maiz y Trigo: CIMMYT) : 1963年メキシコに設立→メキシコ小麦と呼ばれる多収穫品種

#### 【1970年代: 小農の積極的位置づけと国家主導の対策】

1970年代=小農新興信仰+総合農村開発

「総合農村開発」 (Integrated rural development program) = 小農新興信仰を具体的に実現しようとしたもの。

- 1970年代、世界各地で実施
- 農業の生産性向上のための灌漑設備の充実・肥料や農薬の供与、新しい農業技術の不朽指導、保健、衛生、小規模金融などの多方面の対策を総合的に打ち出す

#### 【1980年代: 市場自由化の時代】

総合農村開発→国家官僚機構を残す以外は成果が薄い→新自由主義影響大 (1980代) →構造調整政策 (=農村開発も市場自由化を進める政策へと転換)

構造調整政策 (Structural adjustment program: SAP) = 国家の経済構造を改革 (経済自由化) するべく世銀と IMF が主導した経済政策

- ワシントン・コンセンサス (ジョン・ウィリアムソン) の自由化政策 (価格の自由化政策) 10 か条
  - ① 為替レートの自由化、②金利の自由化、③貿易の自由化、④外資の自由化、⑤民営化、⑥規制緩和、⑦公共支出改革、⑧税制改革、⑨財政の自立、⑩私的所有権の保証

#### 【1990年代: 参加とエンパワーメント】

Top-down でない草の根の活動に取り組む NGO などによる下から (Bottom-up) 活動の見直し  
参加型開発: 農村開発などの地域開発 = 地域の人に主体的決定権を委ねる → 参加 (Participation) 過程を促し、外部者はその変化の過程を外から支援するにすぎない → エンパワーメントへ

#### 【21世紀: 生計アプローチ】

生計アプローチ (Livelihood approach) : 参加の考えを延長し、行為者主体の開発。農家が農村状況、市場動向を判断しそれに基づいて生計戦略をとることを前提。

→ 現在: 多様化した環境適応型農業